桜歯ニュース

2022. 10. 15
VOL.216

日本大学歯学部ホームページ：https://www.dent.nihon-u.ac.jp/

未だ予断を許さない状況のなかで

歯科病院長　飯沼　利光

新型コロナウイルス感染症の蔓延にともない、日本はもとより全世界において人類はこの3年近く、非日常が日常となる社会環境での生活を強いられてきました。国や地域をまたいでの社会活動は制限され、人との交流や情報のやり取りはソーシャルネットワークを主体に行われてきました。この影響は本学にも多くの非日常を招いており、授業はシラバスに従い、各自がコンピュータのスイッチをオンにすると、画面を通して先生の講義が行われ、それをもとに学生諸君は知識や技術の習得を行ってきました。やむをえない状況下とはいえ、いわば守りの学生生活を強いられてきました。

学生諸君もこの状況に戸惑いを感じ、学習意欲を維持する事に苦労をしているかもしれません。もちろん日本大学歯学部では、コロナ禍以前に行われていた、対面での授業や実習の再開に向け最大限の努力をしています。なぜなら、医療では人とのかかわり、とりわけコミュニケーション能力の育成が重要となり、しかも、この習得は画面越しでは難しいからです。今しばらくは我慢の期間が続くかもしれませんが、不安と戸惑いの殻を打ち破り、どんなに厳しい状況でも自分の可能性を信じて、積極性とチャレンジ精神を持って学生生活を過ごしてほしいと思っています。

（教授　歯科補綴学第Ⅰ講座）

学生による学修の向上に向けた自主的な取り組みについて

取組みの経緯

学務担当　林　誠

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、本学では令和２年度より遠隔授業を取り入れており、本年度も講義科目の授業を中心に実施しています。遠隔授業は集団で授業を受けることがなく通学の必要がないため、感染リスクの軽減や時間の節約など、大きなメリットがあります。しかしながら自主的に学修する意欲が求められ、教員間や学習者間のコミュニケーションが図りにくいというデメリットもあります。そこで令和３年度第１学年では、学年主任（基礎自然科学分野・物理学山岡大教授）とクラス担任の先生たちの呼びかけにより、遠隔授業による学修の不安を解消し、学生自身で理解度を高めるため、学生主体の委員会を立ち上げました。このような学生による学修向上を目指した自主的な活動は、国家試験の合格に向けた第６学年の研修小委員会や共用試験の合格に向けた第４学年のCBT委員会など、コロナ禍以前でも行われていました。そこで本年度より学務委員会では、各学年で呼称は異なっていますが、同様な組織を全学年に配置しました。さらに各学年を担当する学年配置の学務委員会委員が担当教員となって、全面的に活動をバックアップするサポート体制も構築しました。現在では各学年での活動にとどまらず、他学年との縦のつながりも重視し、教育に携わる大学院生であるteaching assistant（TA）とも連携しています。これらは遠隔授業をきっかけとした新しい試みでありますが、新型コロナウイルス感染症拡大の収束後も継続させ、本学における学生全体の学修意欲と理解度の向上に結び付けたいと考えています。

（教授　歯科保存学第Ⅱ講座）

第１学年

教員　渡辺　孝康

昨年度の第１学年学生により立ち上げられた学習向上委員会。当時の結成に携わったメンバーはその後、第２学年にてLICと名を変えた組織づくりに一層精を出しています。そんな先輩たちの背中を見て、今年度の第１学年においても学習向上委員会が立ち上げられました。入学早々、４月のオリエンテーションにて先輩方の活動が紹介されると、その活動に興味を示した学生らによって組織立ち上げの機運が高まり、委員会結成に至りました。ただ、昨年度は後期からの結成であったのに対し、今年度は前期から結成するという挑戦的な組織づくりでもあります。対面授業も少ない中で運営方法など課題はありますが、これからの活動に期待しています。

（専任講師　基礎自然科学分野（化学））

学生　佐藤　陽向

私たちが入学した４月、第１学年の学生を対象に行われたオリエンテーションで学習向上委員会を知りました。中学、高等学校までの委員会はそれぞれ毎年活動内容が決まっており、思慮し実行するということはあまりありませんでした。しかし学習向上委員会では委員自らそれぞれの学年に合った活動を考え、熟慮断行していきます。自由な無限の可能性のある委員会を先輩方が試行錯誤を重ね、主体性をもって活動される姿を知り、オリエンテーションに参加していた私たち１年生は感銘を受けました。「学ぶ」ことが当たり前であった日々から、パンデミックによって「学べる」ことの大切さを知りました。この委員会との出会いを大切に、日々活動してまいります。

第２学年

教員　古地　美佳

オンラインの授業や新しいツールの登場で一人でも、どこでも学習しやすい環境になりました。それらを活用して効率良く、楽しく学習できたら良いのですが、やはり欠点もありそうです。同級生と色々な勉強方法を試してみて、自分に合ったスタイルを見つけることは有用だと思います。LICは企画を一生懸命考えています。皆さんにとっては新しい発見があると思いますので、まずは参加してみてください。

（専任講師　総合歯科学分野）

学生　今仲　晏智

私たち第２学年LICは、学習向上委員会を英訳し、Learning Improvement Committeeの頭文字を取って、LICというカッコイイ（？）名前で活動を行なっております。

今年度の活動の目標は、「人と人とのつながりを取り戻す！」です。目に見えないウイルスに分断され、失ってしまった私たちの本来あるべき姿、先生方と学生、先輩と後輩と同じ志を持つ私たちのつながりを、取り戻したいと思います。この委員会を通してお話ししてくださった多くの先生方や先輩方とも、思いは皆同じでした。

前期には、各学年の先輩方や学年主任の野間先生をお呼びし、私たちに熱い思いを伝えて頂きました。後期にも、なるべく多くの先輩方や先生方にお話しいただく機会を設ける予定です。

第３学年

教員　松本　邦史

第３学年は、臨床科目が始まり少しずつ将来の歯科医師像がみえてくる時期です。そして、来年度以降、共用試験、臨床実習、そして国家試験といった大きなイベントが控えている皆さんにとって、モチベーションと基礎学力を高める大切な期間でもあります。学習向上委員会では、先輩たちの意見を参考に様々な企画を考えています。うまくいくことも、いかないこともあるかもしれません。ぜひ積極的に参加し、感想や意見、提案を学年全体で共有してください。そして、皆さん独自の学修対策を構築し、全員で来年以降の大イベントを乗り越えていきましょう。

（准教授　歯科放射線学講座）

学生　二ッ谷　和那美

今年度から発足された学習向上委員会では、来年度に控えるCBTや３年後の国家試験を見据えた様々な取り組みを企画、実行しています。具体的には学年の垣根を超えた勉強会、各教科で重要なポイントを絞った問題集の作成などを行っています。その上で大切にしていることは、縦と横の繋がりです。コロナ禍で希薄になった同学年での団結力を高めることはもちろんのこと、実際にCBTや国家試験を乗り越えた先輩方からアドバイスや学部内の取り組みでの改善点などを直接ご教授いただくことで、自分達の学習面における取り組みに活かしていくことができます。さらに自分達が後輩に勉強の方法や教科ごとのポイントを伝えていくといった取り組みによって、より強固な縦の繋がりを得ることができ、また学習面においても確実な成果を出せると考えています。

第４学年

教員　高津　匡樹・大山　哲生

第４学年は、入学後初めての公的試験であり、臨床実習へ進むための大きなハードルである共用試験（CBT、OSCE）に挑戦する学年です。例年、共用試験関連の学修や運営を、学生同士で支援する目的で、学年内にCBT委員が選任され運営を行っています。学年配置の学務委員会委員はクラス担任とも連携をとりながら、CBT関連業者模試の運営や自主的学修のサポートを行っております。

また、本年度から、平常試験の成績開示が始まりました。他学年と同様に横断的な平常試験等の受験状態や成績の評価を行うために、各教科から公表された成績を基に資料作成を行い、クラス担任とも連携をとりながら面談等による学修サポートを行っています。

（准教授　歯科補綴学第Ⅰ講座・専任講師　歯科補綴学第Ⅱ講座）

学生　北澤　春輝

CBT委員は、学年全員合格を目指して、一丸となって日々活動しています。活動内容は、主に模試の運営、補講や勉強会の開催、CBT関連情報の共有です。先日の第１回模試は、委員が機能的に連携し本試の形式に沿って円滑に運営を行うことができました。また、勉強会は、定期的開催で５年生の先輩方に協力を仰ぎ、本試までの流れ、勉強方法、参考書の使い方等、先輩方の経験を基にした幅広い知識を学ぶことで、CBTに対する意識向上を目的としています。今後は、より多くの学生に参加を募り、４年全体でCBT対策を行なっていきたいと考えております。

第５学年

教員　津田　啓方

勉強は基本的には自分でやるものです。ただ、一人の勉強だけですと、独りよがりな解釈で間違えた知識となってしまう場合もあります。また、理解に時間がかかる場合もあります。さらに、本当に頭に入っているかどうかのチェックも必要ですが、適切な方法を見つけきれていない学生さんもおります。中心メンバーの菅谷君と丸山君は、教員を巻き込みつつ、これらの事をより効率的に解決できるような勉強会を企画し、第１回目の会の開催に向けての準備を行っております。また、第3、第４学年の学生と勉強を通じた交流会を行い、主体的に勉強に取り組むことを後輩にも伝染させようと企てております。皆さんの積極的な参加と応援をお願いいたします！

（准教授　生化学講座）

学生　菅谷　侑真

第５学年研修小委員長の菅谷侑真です。これまで、私達の学年は仲の良い友達だけで集まって勉強しておりました。これはこれで良いのですが、わからないことを解消しきれない事もあるかと思います。みんなで集まればこの不得意分野を解消しやすくでき、先生方の参加を呼びかけやすくなると考えました。そこで、みんなで集まる勉強会を開き、各教科の先生方をお呼びし、質問＆解説のしやすい環境を作ることを企画しております。その中でアウトプット、インプットの大切さや集まって勉強する良さを実感してもらい、より多くの学生が自発的に集まり勉強する会ができたら良いと考えております。また、他にも学年間で勉強を通して様々な繋がりを作ることができる会も計画しております。

ワールド・カフェ

小林　理美

第１学年『自主創造の基礎』の授業の一環として日本大学ワールド・カフェが６月５日（日）にオンラインにて開催されました。ワールド・カフェとは、Juanita Brown氏とDavid Isaacs氏によって、1995年に開発・提唱された対話手法です。その名の通りカフェのようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれたテーブルでテーマについて対話を行い、他のテーブルのメンバーとシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を集めることを特徴としています。

今年度の日本大学ワールド・カフェには日本大学全学部（16学部、通信教育部、短期大学部）の第１学年、約16,000人が参加し、キャンパスの垣根を越えて交流を行いました。本授業は初開催された2017年以降、複数のキャンパスを会場として対面で行われていましたが、コロナ禍に入ってからはオンラインで開催されています。歯学部支店には、まさに言葉通り日本全国の様々な学部から約230人の学生が来店し、「所属学部や他学部のことを知って日本大学について考える」という今年度のテーマについて積極的な話し合いが行われました。

私はファシリテータとして、前々年度に次ぎ２度目の参加となりました。私自身も本学出身ですが、学生時代には他学部との交流はほぼ皆無で、総合大学にいながらまるで単科大学で学んでいるような学生生活だったので、このような全学部の学生が集う機会が授業の一環としてあることは新鮮でした。当日は、オンライン開催ならではのトラブルに見舞われたものの、教職員の方々の迅速的確な対応のおかげで全体の流れは乱れることなく、スムーズな進行となりました。準備から当日まで様々な業務にあたって下さった教職員の方々に厚く御礼申し上げます。

（助手　基礎自然科学分野（生物学））

ワールド・カフェ担当教職員

ワールド・カフェに参加して

武田　晋

今年のワールド・カフェはオンライン開催であったため、グループワークをする際に、誰から話し始めたらよいかわかりづらいなど、コミュニケーションの難しさを感じる場面が多くあり、会話が弾むか最初は不安でした。しかし、１人の学生が話し合いの内容をまとめてくれたおかげで、スムーズに会話が進むようになりました。コミュニケーションをとる際、リーダーシップをとる人の存在が重要であることに気づくと同時に、自分もそうありたいと思いました。

グループワークの最初のテーマは、「自分の学部の魅力やおすすめしたい点」と「自分の学部に対してこうあったらいいなと思う点」でした。それぞれの学部の良いところを挙げていくと、図書館の大きさや学ぶスペースの充実など、学びやすい施設を各学部が持っていると実感できるとの意見が多くあがりました。そして、グループワークの最後のテーマは、「日本大学に対しもっとこれができるといいなと思う点（希望）」についてでした。学部を超えて学生が意見交換し、考えることは貴重な経験でした。ワールド・カフェで出た意見をきっかけに、より充実した大学生活を送れる環境となればと思います。

今まで、歯科医師を目指す同じ夢を持った仲間達と話してきましたが、ワールド・カフェでは、他学部で違う夢を目指す人達との話し合いを通じて、今まで思いつかなかった多様な価値観や考え方を学ぶことができ、とても有意義な時間を過ごす事ができたと思います。ワールド・カフェで得た新しい経験や発見を、今後の学校生活で活かしていきたいです。

（第１学年）

ファシリテーター　佐藤紀子先生

歯学部学生FDしゃべり場に参加して

角田　麻里子

令和４年７月13日に、ラーニングコモンズ（本館１階）にて「しゃべり場（2022)」が開催されました。しゃべり場は学生が日々感じている大学への意見、思いをディスカッションする場であり、私たち教員も参加することで、直接学生の意見を聞くことができる貴重な会になります。

今年度のテーマは、「コロナ禍を経験し、学生の生活はどう変化したか（そこに改善点はあるか？)」でした。各学年からの参加者5～6名ほどの小グループに分かれてのディスカッションを経て、各グループの発表、そして最終的には総括を行い会は終了しました。久しぶりの対面かつ新校舎での初めての開催とあり、広々とした空間の中、学生間で活発に意見が飛び交っていたのが印象的でした。

ディスカッションの内容としては、やはりオンライン授業を経験しての意見が目立ちました。学生が良かったと感じた点は、自分のペースで学ぶことが出来ること、録画による授業の復習が充実したこと、教育環境がICT教育に順応しつつあることを挙げていました。改善点としては、資料や授業の規格を統一してほしい等の意見が上がっていましたが、学生間でのコミュニケーションや様々なツールを用いることで克服している点に感心する面もありました。また、特に関心が高かったのが、後期の授業が対面へと切り替わることについてでした。対面授業へ切り替わる変化への不安、またオンライン授業では経験できなかった、より能動的な授業が実施されることへの期待が入り乱れており、学生にとって後期授業への関心が高いことを窺い知ることができました。

（助教　病理学講座）

「しゃべり場」について

丸山　佳人

この度は、先日行われた「しゃべり場」についてお話しさせていただきたいと思います。そもそもしゃべり場とは、第1学年から第5学年のクラス委員、教員、大学の職員方で放課後に集まり、その都度決められたテーマについてグループで話し合い、お互いに発表する会となっています。

話し合うテーマは基本的に学生生活に関連した内容のものが多く、例えば令和元年度では「より良い大学生活を送るために、改善できること」をテーマに話し合いをしました。今年度は新型コロナウイルスの蔓延を経た約２年ぶり開催された会ということもあったため「コロナ禍を経験し、学生の生活はどう変化したか（そこに改善点はあるか？)」をテーマに話し合いを行いました。この様に、題材はその時々学生自身が話し合いたいテーマとなります。例えば今年度のしゃべり場で出された意見の例として、遠隔授業で始まった授業の録画の継続希望や、コロナ禍で実施がされなくなったクラス会（クラスでレクリエーションを行うもの）の実施、などが挙げられました。

しゃべり場では、話し合いをするだけではなく、上記の様な要望等がそのまま学校サイドに提出されることもあるため、結果として私達学生にとってもメリットのある会となっているとも感じます。

また個人的に、この話し合いを学生だけで行うのではなく、学生と教員、職員の方々と行える事がとても大切だと感じました。様々な立場での考えや意見の違いを知る事もでき、とても貴重な経験となったと思っております。

（第５学年）

しゃべり場での様子

新任教員FDワークショップに参加して

小笹　佳奈

未だ、COVID-19の収束が見えない中、今年度も昨年度同様Zoomを介し、新任教員FDワークショップが開催された。本セミナーは日本大学FD推進センターが新規採用教員を対象とし、高等教育を取り巻く環境の変化、大学教員の役割・責務を認識するとともに、本学の教育理念及び教学施策を理解することを目的とし開催しているものである。まず初めに、「日本大学の教育について」生産工学部藤井孝宜教授のご講演があり、日本大学教育憲章や三つの方針を基点とした日本大学が目指す教育について学び知識を深めることができた。続いて、「学修目標の設定とシラバス作成」について短期大学部（三島校舎）石川元康准教授のご講演があり、学修目標には一般目標（GIO）、個別行動目標（SBOs）があり、シラバス作成や授業にあたり目標を明確に示す必要があることを学んだ。その後、少人数制のグループに分かれグループワークを行った。他学部の先生とのディスカッションを通し、先生方が学生と接する際にどのようなところに気を配り、授業のプランニングを行っているのかを知ることができ、有意義な時間となった。セミナー後半には、薬学部岸川幸生教授による「成績評価と授業評価」、松戸歯学部平山聡司教授による「日本大学の教育改善活動」を拝聴した。ご講演ならびに他学部の先生方とのグループワーキングを経験し、授業デザインの実施方法等について、理解を深めることができた。本セミナーで得た様々な知見をもとに、教員として自主創造の理念を備えた歯科医師の育成に貢献していきたい。

（助教　口腔内科学講座）

全学FDワークショップ

大学教育における課題の解決策に向けて

木谷　仁

私は、本年9月1日（木）・2日（金）に開催された令和4年度全学FDワークショップに参加致しました。本年度は新型コロナウィルス感染拡大の影響でハイブリッド開催となり、私は自宅より参加致しました。本ワークショップでは「日本大学教育憲章」を基盤とした教育と、その教育の実現のためのアウトカム基盤型教育の実践のためにどのような授業づくりを行い、運営すべきかを検討し、その基盤となるシラバスづくり、カリキュラムの作成、学修の目標設定および学修評価についての基準がどうあるべきかを、総合大学日本大学の様々な学部教職員一人ひとりが複数のグループに分かれ、1つの科目の授業デザインについて討議しました。私たちのグループは授業科目の作成において、日本大学の教育理念である自主創造について、その理念のもとでどのような授業を行えば、学修者（学生）の知識を育む上で有用となる授業を作り上げることができるのかを検討しました。私たちが作成した授業科目は日本大学マインド（自主創造型パーソン）養成コースとし、全学部共通科目とすることで、大学における学修の基礎となる自主的な学び、考えおよび発信に必要なスキルを修得することが今後の学修者に求められる要素ではないかと考えました。私にとって、分野の異なる教職員がそれぞれの視点から考案する授業づくりを行った本ワークショップは、多様な考え方を知る良い機会となりました。来年度より、歯学部では新カリキュラムへ移行します。その際に教職員が学修者に対してどのように学修への参加を促し、自主的に学修に取り組んでもらえるか、学修効果の高い新カリキュラムの策定が今後の本学の根幹となるのではないかと改めて感じました。

（助教　歯科補綴学第Ⅲ講座）

随想

日本大学歯学部、外から観ていたこと、内からみえたこと

外木　守雄

本学部に奉職、赴任して、早いもので、もう10年が経とうとしています。

私は他大学出身なので、今までの外から観ていた日大歯学部の印象、内からみえて来たことを随想します。

まず、外から観た本学部は、排他的、敷居が高い、運動系、団結力が強い、などがあり、これを内から見ると、仲間意識が高い、礼節を重んじる、に集約します。本学は決して排他的でなく、教授にも他学出身者が多数おられますが、いずれも、卒直後より日大に入り、そのまま成長して教授になった方がほとんどで、私のように中途入職は珍しい事であり、口腔外科では“初”であったようです。なぜ、中途の教授がダメだというと、今までずっとみんなで努力して来たことをよくわかりもしない“余所者に掻き回されたくない”という意識が根底にあるようです。そこで、私は、出来るだけ多くの行事に参加し、入学式、卒業式でも日大校歌、歯学部部歌を覚え、大声で周りに聞こえるように歌いました。『日大研究者だより』に取り上げてもらい、テレビ出演も多数こなし、日大の宣伝に努めました。また、学内では手付かずであった卒後生の国試不合格者の対策を、本田学部長、米原次長と立ち上げました。毎週昼に集まって多くを語りあったことが思い起こされます。今では合格支援も軌道に乗ったと思います。そんな中5年ほど経つと、“お前はもう日大の人間だ”と言ってもらえるようになりました。“日大に馴染むには努力と少し時間がいる”ようです。また、日大には、“悪人がいない”、ことを痛感しました。善人でお人好しは沢山いるけど心底人柄の悪い人物は皆無でした。そんなお人好しな面が、昨今の国試の結果にもつがっているように思えます。学生の質、教員の教育能力、環境は申し分無いのに、なぜ合格率が芳しくないのか？それがお人好しな面が強くでているのではないかと思います。

最後に、日大教授だから多くのことができました。中でも日本大学ボクシング部部長は、単科大学出身者の私にはとても驚きで新鮮でした。また、第67回日本口腔外科学会大会長、日本睡眠歯科学会理事長、歯学系学会社会保険員会連合会長を務めました。これらはすべて日大にいたからこそできたもので決して自分の力だけでは無いことを自覚しています。

本学部の今後の発展を祈念しております。

（教授　口腔外科学第Ⅰ講座）

実証研究を終えて

中島　一郎

2011年に医療人間科学分野教授に就任して以来、私の研究テーマは東南アジアにおける情報通信技術（Information and Communication Technology、以下ICT）による地域医療の構築を実証することでした。保健医療基盤の脆弱なLao People's Democratic Republic(ラオス人民民主共和国、以下ラオス)を対象国とし、東南アジア地域における医療ICTを普及・展開する上での検討課題を明らかにする国際医療研究プロジェクトを発足しました。ラオスにおける唯一の医療系大学であるUniversity of Health Sciences と日本大学とで歯科医用画像を地域医療で活用できる人材育成や技術移転から研究活動は開始されました。2018年からは歯学部、医学部、理工学部、経済学部、短期大学部（三島）の各学部との連携で、医療ICTを活用した遠隔画像診断の実証研究を終了し、2021年において、ラオス国内の遠隔画像診断の実用化に至ることとなりました。またラオスの国立病院において糖尿病患者と医師とのスマートフォン・アプリケーションによる医療支援情報の共有・管理システム（Lao Diabetes Healthcare Network System ）の開発も進み、実際の糖尿病医療での検証も行われました。研究成果は論文、図書、国内外シンポジウム等で発表しました。

研究成果をもとに東南アジア全体に医療ICTを展開することで、医療従事者不足の解消、医療格差の是正、医用画像診断の普及が期待されています。

研究プロジェクト関係者のご支援、ご協力に心から感謝いたします。

私事ですが、数年前に一般社団法人を仲間と設立しましたので、今後は法人活動を通じて離島やへき地で医療ICTを活用できる医療人育成に尽力できればと存じます。

日本大学歯学部の皆様、引き続き御指南のほどよろしくお願いいたします。

（教授　医療人間科学分野）

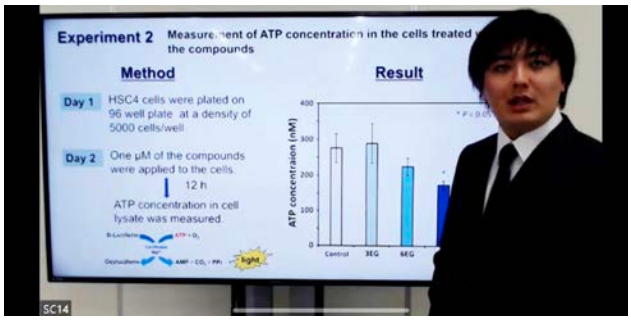
Student Clinician Research Program (SCRP) で知ったPEG

関本　和祥

「特定のポリエチレングリコール（PEG）は癌のエネルギー産生を止めることができるのです。」PEGといえば生物由来の高分子化合物であると、歯周病科の先生もそう言っていた。それで癌を殺せるなら最高じゃないか、そう思った。

腫瘍細胞とは無制限に増殖するものであり、その原因はDNAの損傷にあると言われているが、結局のところ未だその原因は定まっていない。今のところ腫瘍細胞の発生箇所の切除、化学療法や放射線治療で殺したりすることでしか癌の治療方法はないのだ。ただ、ドラマでもよく見られるように、こうした治療は患者への負担が激しく、特に化学療法は正常細胞まで傷つけてしまうことが多い。そのことが治療の際に大きな障害となっている。では、もしこれらの副作用を克服できた抗がん剤があるのなら？そんな夢のような話を運んできてくれたのがPEGだった。PEGはなんと正常細胞にダメージを与えることなく腫瘍細胞のエネルギー産生のみ抑制して殺すことが出来ると言うのだ。しかしその一方で何故そんなことが出来るのかはよく解っていないと言う。残された研究課題としては「何故PEGが腫瘍細胞のみを殺すのか」という点だった。今回のSCRPでは、そのとっかかりとしての比較研究をやらせていただくこととなった。研究結果としてPEGの構造を変えることでその効果が変わることが明らかになったが、新たに別な課題も現れた。詳細は省くが、その課題を解明することによって作用機序解明につながるかもしれない。

今回SCRPは残念ながら上位入賞とはなりませんでしたが、一つ一つ疑問を潰していくという研究の醍醐味を知ることができました。不慣れかつ未熟な私に指導していただいた解剖学第Ⅰ講座の藤原先生、また様々なサポートをしてくださった教務課の金子さん、鈴木さんに謝意を表しまして、この文を締めさせていただきます。　（第５学年）



歯学体中止について

歯学体正評議委員　高泉　淳大

今年の全日本歯科学生総合体育大会は、新型コロナウイルスが流行しているため人の移動を増やすことによって感染者の増加に加担してしまう、競技ごとにクラスター発生の可能性がある、クラスターを起こした際に地域に対して多大な迷惑がかかり、歯学自体が厳しい非難に晒される、歯科医療を学ぶ学生としてこの状況で大会を行うのはよろしくない等の理由で主管校から中止の提案を受けました。

歯学体に向けて精一杯練習を頑張ってる友人の姿を見ていましたし、初の歯学体を楽しみにしていた1、2年生もたくさんいたかと思います。私的な話ですが一番近しい5年生の友人達にとっては三年ぶりの大会且つ参加できる最後の歯学体でした。是非とも日々の部活動で努力した成果を発揮して欲しいと思っていましたため、開催を願いながらデンタル開催の可否の会議に参加しておりました。しかしながら中止となってしまいました。新型コロナウイルスの影響とはいえ開催されることを楽しみにしていた仲間たちのことを思うと大会開催約一週間前という直前に中止になるのは非常に残念でした。努力の成果を発揮する場さえ与えてもらえない悔しさや悲しみは計り知れないと思います。

しかし日々、部活動で精一杯練習に取り組んだ努力は今後の人生で役に立つと思っています。来年の歯学体に参加できる１～４年生はまた次の目標に向かって頑張って下さい、今年培った努力が報われるはずです。今年最後だった5年生は今まで部活動で身に付けてきた様々な力を国家試験対策に存分に活用してください。今後の活躍を願っています。

私が歯学体正評議委員として歯学体に関わるのは最後となります。開催こそできませんでしたが、歯学体に携わることができ非常に光栄です。今までありがとうございました。　（第４学年）

クラブ短信

コロナ禍で中止されていたクラブ活動が再開しつつあります。
本号、次号（217号、2023.1.15発刊）にわたり、最新のクラブ情報をお伝えします。
本号では、歯学体夏期部門に参加予定であったクラブを紹介いたします。

合気道部

主将　内村　圭一朗

合気道部は年々部員が減り続けていき、現役部員は執筆者である私一人のみとなってしまいましたが、昨今はクラブ自体に所属しない学生が増えていると聞きます。クラブに入ってしまうと勉強やバイトやプライベートの時間がなくなるという意見もあるとは思いますが、クラブでしか得られない学びや経験があります。私はクラブに入っていなければ勉強ばかりで煮詰まってしまい、大学生活に楽しみを見い出せなかったと思っています。合気道は日本だとマイナーなスポーツですが、欧米では「動く禅」とも称される人気のスポーツだったりします。1、2年生の中でクラブに入ろうか悩んでいる方や入り損ねた方がいましたら、いつでも気軽にお声掛けくださいませ。（第5学年）

空手道部

主将　菅谷　幸之介

空手道部には、1年生2名、2年生3名、3年生1名、5年生4名、6年生2名の計12名が現在所属しています。

コロナ禍以前は週2回稽古日がありましたが、現在は学年によって登校日が異なるため、週1回3号館地下3階の道場で、先輩が後輩を指導する形で組手、形の基本稽古を行っています。

至近距離における発声を伴う競技ではありますが、道場の換気およびマスク着用による飛沫感染防止を心がけ、また稽古の前後には監督の清水康平先生と必ず連絡を取り常に感染防止には細心の注意を払っています。

夏休み中には、大学の道場において通いで5日間（7月29日～8月2日）の集中稽古を行いました。デンタルや合宿がない夏でしたが、久しぶりに短期集中の稽古を行うことで部員同士の絆が強くなった夏になりました。（第5学年）

剣道部

主将　熊野　晃

本年度は3年ぶりにクラブ活動が再開され剣道部も練習を週3回（月・木・土）行っております。クラブの勧誘は例年と異なり、新型コロナウイルスの感染対策を行いながらの制限あるものとなりましたが、多くの1～3年生の新入部員を迎えられたことを大変嬉しく思っています。また本年度から私が主将となりました。至らない点も数多くありますが再開から3ヶ月ほどが経ち、通常の稽古に加え、他大学との合同稽古会や強化練習を行なったりと充実した活動を進めています。今後も学生生活ならびに稽古も含めての感染対策を徹底して行い、本年度は残念ながら中止となったデンタルの開催・参加・勝利を期して更に精進して参ります。（第3学年）

硬式庭球部

主将　中嶋　泰悠

５月から部活動が解禁され、やっと練習を再開することができた。幸い多くのテニス好きな新入部員にも恵まれ、新しいチームとして部活動を楽しむことができている。これも日頃からご支援頂いている学内外の先生方や保護者の支えがあってこそだと改めて感じた。また、部活動は定期的に身体を動かすことだけでなく、学年の枠を超えて交流して互いに良い刺激を与え合う貴重な機会であると再認識することができた。残念ながら直前でオールデンタルが中止になってしまったように、コロナ禍以前と同様に活動することは難しい状況である。しかし、活動できることへの感謝を忘れずに、来たる試合に向けて部員一同一丸となって練習に励みたいと考えている。

(第４学年)

硬式野球部

主将　平田　隼輝

我々硬式野球部の球春は、５月半ばに漸く訪れました。現在は週３回、主に神宮室内練習場や、近隣の球場で練習を行ったり、時には他校と練習試合を行ったりしています。

神宮室内練習場では、基礎系のメニューやバットをたくさん振り込むことに時間を割き、球場での練習では、普段できないような実践形式の練習や連携プレーの確認など、グラウンドを広々と使って練習を行っております。

昨今のコロナ禍で、活動ができない日々が続いておりましたが、感染対策を講じ、目標であるデンタル優勝に向けて汗を流しております。

OBの先生方や先輩方のご支援のおかげでこの野球部を運営していくことができております。思い切り野球ができる有難みを感じながら、今まで先輩方が築いてこられた伝統を次の世代に繋いでいけるよう日々努力したいと考えております。　(第５学年)

ゴルフ部

主将　高澤　就

ゴルフ部の現在の活動は、ゴルフ練習場からの要請で１打席１名という決まりとなっています。そのため週１回ではありますが、火、水、金曜日の３日に部員を振りわけ、練習場で自分の打ちたい球数を打つという練習形態となっています。また、コロナ禍ということもあり現在は実施できていませんが、月に１回のラウンドも行なっています。練習場では上級生が下級生にクラブの握り方からフォームの指導を行なっており、そのような練習方法であることから、部員は上級生、下級生それぞれが規律のもとに仲良く活動を行なっています。ラウンドを行う際も、その時々で組み合わせを考慮し、部員が互いに研鑽を積むことができるようにしています。

(第５学年)

サーフィン部

主将　鈴木　凌

私たちサーフィン部は主に、夏の長期休みなどで海辺のコテージなどに行きサーフィンを行っています！初心者も多く、サーフィン経験者の部員に教えてもらいながらサーフィンを練習していくことを主な活動としております。上下関係なく仲が良い部活となってます。また活動がない時などは、先輩方に

ご飯に連れて行ってもらったりなど、プライベートでも交流がある部活です！　（第４学年）

サッカー部

主将　江渡　俊介

現在サッカー部では水曜日と土曜日の週２日、主に日本大学松戸歯学部のグラウンドで活動しています。コロナ禍での部活動開始当初は例年使っていたグラウンドが使用できなかったり、都の感染状況が不安定であったことから常に東京都の感染状況を確認しながら幹部で集まって毎週の練習場所や練習内容を決めたりしていました。活動内容としては、走り込みやボールを使ってパス・シュート練習などの基本的な練習からチームごとに分かれて試合形式での実践的な練習まで幅広く行ないながら、共有の給水ボトルの使用をやめて各自で用意することや、同じビブスを複数人で使用しないようにするなど常に感染対策に留意しながら秋季大会や来年度の春季リーグ戦に向けて活動をしています。　（第４学年）

柔道部

主将　新藤　佑大

柔道部は、５月初旬の歯学部内部活解禁と同時に活動を再開しました。５月、６月は外部練習や合同練習は行わず週１回部員のみで練習を行いました。７月からは感染対策を講じながら、コロナ禍以前と同様に東京歯科大学と合同練習を行いました。また、本年度は３年ぶりにデンタルが行われ、柔道部門の部門主管を務める予定でしたが、直前で中止となってしまいました。残念ではありましたが、大会を運営するに当たっての準備の大変さや難しさを学ぶことができ、非常に良い経験になりました。来年こそはデンタルが開催されることを願い、部員一丸となって再び部門主管にチャレンジしたいと思います。

（第３学年）

水泳部

主将　大山　泰世

水泳部は「以前のような活気ある部活動を取り戻したい、後輩たちにも感じてもらいたい」という気持ちから、２年間の部活動停止を機にコロナ禍における部活動のあり方を部員全員で考え直しました。４月からは新入部員と共に３年ぶりに活動を再開し、練習だけでなく医学部・松戸歯学部とともに３学部戦を行いました。

今年は歯学体の開催が中止となりましたが、水泳

部門はその代替大会として全日本歯学生水泳記録会の開催が決定しました。我々水泳部は2019年の歯学体で準優勝に終わり、5連覇を逃した雪辱を晴らすべく一丸となり練習してきました。しかし、台風の影響で参加を辞退することとなりました。来年の歯学体では参加辞退の悔しさをバネに歯学体優勝を果たすと共に、他校の学生との交流も楽しみたいと思います。　(第4学年)

ソフトテニス部

主将　山本　直季

今年度は、2年生1人3年生2人を新たに迎え皆でこのコロナ禍に負けぬ様部活動に励んで参りました。具体的な内容と致しましては、毎週2日放課後4時間行っておりました。コロナ禍ですので、以前までの部活動とは違い感染対策ガイドラインというものを作成し、そのガイドラインに沿って活動を行っていました。以前と全く同じ様な内容ではありませんでしたが、久しぶりの部活動ということもあってか皆オールデンタルに向けて懸命に練習に取り組んでいました。

しかし、コロナ感染者数がオールデンタル直前で急増し、大会は中止となってしまいました。今年で引退となる先輩方をはじめ、非常に悔しい思いでしたが秋の大会や来年度のオールデンタルに向け、また部員全員が一丸となって練習に望んでいきたいと考えております。　(第4学年)

卓球部

主将　倉田　朱寧

6月から部活動が再開され、多くの新入部員が加わりました。初めは、再開されることの喜びよりも、先輩方が引退してしまい、自分たちが部を引っ張っていくことができるのかという不安の方が大きかったのですが、先生や先輩方からのアドバイスと部員のみんなの協力によって、楽しく活動することができました。前期は人数や対面授業の日程により、部員全員で集まることができなかったので、交流を深めるためにも、今後は全員一緒に活動することができたらと思っています。そして、残念ながら今年の夏のデンタルはありませんでしたが、次は3月の東日本医歯薬大会に向けて、より一層熱心に部活動に取り組んで参りたいと思います。　(第4学年)

日本拳法部

林　隼太朗

私達日本拳法部はプレイヤー7人、マネージャー5人で、後期はオール日大優勝を目標に活動しています。

普段の部活動では体力づくり、基礎練習、打ち込み、試合をイメージしたスパーリング(周り防具)などを行なっています。

夏のデンタルがコロナで中止になってしまったため、前期の練習を活かせる機会がありませんでした。後期はオール日大優勝を目指してチーム一丸となって練習に取り組んでいきたいと思います。(第4学年)

バスケットボール部

主将　前田　匠

2年間の活動休止を得て再開したクラブ活動は、部としてのケミストリーを継承することに加え多くの新入部員を迎えての活動再開であったことやコロナ禍における活動制限があったことから活動再開に際して不安が多かったものの、部員全員で協力し合

うことで充実した活動ができていると感じている。そんな仲間たちと臨む予定であった久々のオールデンタルが開催１週間前に中止となり、デンタル優勝を目標としていた我々にとって非常に悔しい知らせではあったが、部としては来年に向けて勇往邁進し、来年こそは目標であるデンタル優勝に向けて努力を重ねていこうと思う。引き続きご支援ご鞭撻の程よろしくお願い致します。　（第４学年）

バドミントン部

主将　角　賢典

バドミントン部では、例年使っていた体育館がコロナ禍ということもあり、使うことができなくなり、現在、日本大学松戸歯学部の体育館で毎週土曜日の13時から16時まで部活動を行っています。10月からは例年通り新木場や亀戸の体育館で週２回の部活動を行い、11月開催予定の秋大会に向けて練習をしていく予定です。現在の部員は約35名で、ほとんどが大学からバドミントンを始めています。主な練習内容としては、フットワークのトレーニング、スマッシュやレシーブなど実際にラケットを使う基礎的な練習をします。そして最後に、試合形式のゲームをすることによって技術を定着していく流れで練習をしています。感染対策に気をつけながら、いつも楽しく明るい雰囲気の中、秩序と責任のある部活動を行っています。　（第４学年）

バレーボール部

主将　池上　聡一

バレーボール部は４月に１～３年生の勧誘をオンラインにて行いました。そして合計25名の新入生が入部し、５月には対面での部活動が開始されました。コロナ禍前とは違い、体育館の人数制限や、ウォーミングアップまでマスクの着用など様々な制限下で行いましたが、皆元気に一丸となって部活動をしています。

例年とは違う環境であったので、部活動の仕事等で難航することもありましたが、部員の協力のもとうまく活動を行うことができ、とても感謝しています。

また、久々のオールデンタルに向け練習を行い、クラブの良さを再び実感することができましたが、オールデンタルの開催中止が決まりとても残念で仕方ありませんでした。後輩たちが来年のオールデンタルで良い経験ができればいいなと思います。

（第５学年）

ボウリング部

主将　中里　紀璃

ボウリングは気軽に始められる一方で、とても奥の深いスポーツです。立つ位置、ボールが手から離れるタイミング、回転のかけ方など、技術を身につけるとピンがより多く倒れ、ストライクも沢山取れるようになります。ストライクを出したり、スペアを取れたりした時の達成感は格別です。自分の目標のスコアを出す

ために試行錯誤をしたり、仲間と競ったり、共に励まして盛り上がったり、ボウリングには沢山の楽しみ方があります。コロナ禍の影響もあり部員が減り、廃部の危機が迫っていましたが、１年生が入部してくれました。週に１回 2 時間ほど都内のボウリングセンターで、コーチの技術指導を受けながら、ボウリングを純粋に楽しんでいます。　（第６学年）

ヨット部

主将　長谷川　友大

ヨット競技は聞き慣れないスポーツですが、海上に設定された目印を決められた順番で回る、レース形式の競技です。歯学体では２人乗りのヨットで競いますが、１人は舵取りをする「スキッパー」、もう１人は風や波を読み推進力にかえるために船のバランスを取る「クルー」とそれぞれ役割があります。現在、部員は１年４名、２年１名、３年４名、４年６名、５年３名、６年２名の計20名で、活動は週末に新木場の若洲海浜公園で練習をしています。ほとんどの入部者が初心者ですが、OBあるいはコーチの先生の指導のもと安全第一で練習を行なっています。ヨットはスピード感があり爽快感があることと自然を相手にすることが醍醐味です。興味がある方は、是非とも入部して下さい！大歓迎です！

（第４学年）

洋弓部

主将　鈴木　亜弥子

こんにちは、洋弓部です！

私たち洋弓部は、合計20人程の新入部員を加えて部活動を再開しました。

久しぶりであったり、待ちに待った活動であったり、部員がさまざまな思いを心に抱えている中、ゆっくりと手探りで練習を行っていましたが、残念ながら、夏のオールデンタルは中止となりました。

しかし、関東歯科学生による秋の大会が決まり、それに向けて部も舵を切り直しました。

コロナの影響が大きく、新入部員の道具がなかなか届かないというトラブルもありましたが、今はその事態も落ち着き、部員一同も一層の気合が入っています。

競技的にも多大な注意が必要な部活ではありますが、安全や感染への対策に一層注意しながら、秋の大会では全員が納得できる結果を残せるよう励んでいきたいと思います。　（第４学年）

陸上競技部

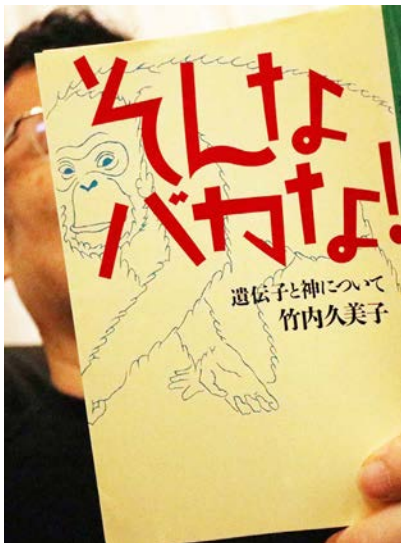
主将　今村　空

陸上競技部は週２回、火曜日と金曜日に代々木公園内の織田フィールドや夢の島競技場などで活動を行っています。織田フィールドでは、短距離や中長距離といったトラック系を、夢の島競技場ではトラック系に加え、跳躍や投擲といったフィールド系の競技の練習を行っています。陸上競技の経験者はもちろん、未経験者であっても上級生などから指導を受け，他の部員とともに切磋琢磨することで、全日本歯科学生総合体育大会などで活躍をしています。今後も公私にわたり陸上競技部ならではの雰囲気を大切にしながら、コロナ禍で３年続けて中止となってはいますが、全日本歯科学生総合体育大会を５連覇中であり、６連覇に向けて日々練習に励んでいます。　（第４学年）

『そんなバカな！ 遺伝子と神について』

竹内久美子著

西田　哲也



子供の頃から、身のまわりで起きる現象を理論的に紐解いてくれる、科学系の読み物は好きでしたが、本書はそんな私の好奇心にズバリ応えてくれた本でした。様々な生物が、ヒトが、男が、女がどうして地球上に存在しているのか、文学的には謎のベールに包まれていても、この本を読めばスッキリしたことが衝撃的でした。

本書によれば、生物の体は“利己的遺伝子（セルフィッシュジーン）”を乗せた乗り物（ヴィークル）であり、神も“利己的遺伝子”が作り出したもので、つまり創造主は外ではなく内にいたということになります。世が世なら間違いなく、著者や本の所持者は磔か火あぶりになりそうな書物ですが、繊細な問題をも明確に記述しているのが本書の素敵なところです。

人は皆、現象（結果）から過程を推測する際、そこには思慮深い意図があると思いがちですが、過程があって結果は必然的に決まるもので、それは単純であることが本書を読むと理解できます。

例えば、本書を読む前に、「コロソマという魚がピラニアに似ているのは、ピラニアの共食いをしない習性を利用し、ピラニアから襲われないため」と聞き、釈然としない思いがありました。しかし本書を読むと、話しはもっと単純で、ピラニアに似ているコロソマが捕食されずに種をつないでいった結果、現在のコロソマはピラニアに似ていると考えることができました。

生物や創造主が考えたわけでも工夫したわけでもなく、利己的遺伝子の生存戦略の中で合致したものが現世に存在しているというだけの話しであって、そこにはオカルトもセンチメンタルも何もなし！そこが本書の魅力であると思います。

（専任講師　歯科保存学第Ⅲ講座）

いま夢中です、この仕事！

ビッグデータと実験から癌の性質を探る

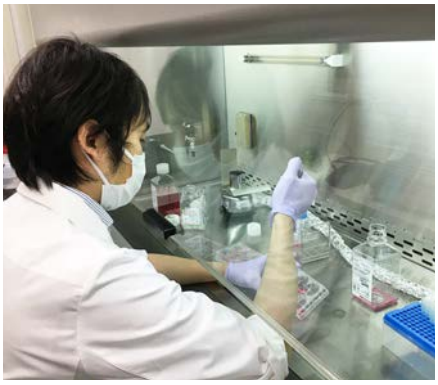
岡﨑　章悟

私はもともと近畿大学薬学部の出身ですが、博士課程からポスドクの6年半は慶應義塾大学医学部に所属し、その後、東京理科大学生命医科学研究所に助教として3年半、そして2022年4月より、感染症免疫学講座の助教として着任しました。

これまで、いろいろな研究室を渡り歩いてきましたが、一貫して癌研究に携わっており、癌の性状を明らかにし、新たな治療法を開発することを目指して研究を進めています。

癌研究を進める上で強力な武器となっているのがビッグデータの解析です。最近は色々な分野でビッグデータの活用が進んでいますが、生物学の研究も例外ではなく、その中でも癌研究はビッグデータの整備、活用が進んでいる分野の一つではないかと思います。最も有名な癌臨床検体のデータベースであるThe Cancer Genome Atrasにおいては、33種の癌について、遺伝子異常や遺伝子発現、DNAメチル化やmicro RNAなど、膨大なデータが蓄積されており、総データ容量は2ペタバイト（テラバイトの1000倍）以上となっています。この膨大なデータが自由に解析できるので、癌研究を進める上でこのデータを使わない手はありません。

とはいえ、このようなデータベースには研究を進める上での大きなヒントは隠されているものの、



データを眺めているだけでは癌の性状解明や、新たな治療法の開発にはつながりません。そのため、ビッグデータによる解析と実際の癌細胞を使った解析を併用することで、まだ明らかとなっていない癌の性状を解明するとともに、新たな癌治療法の開発につながるような研究を行っていきたいと考えています。

（助教　感染症免疫学講座）

日本薬理学会関東部会 優秀賞受賞

小林　理美

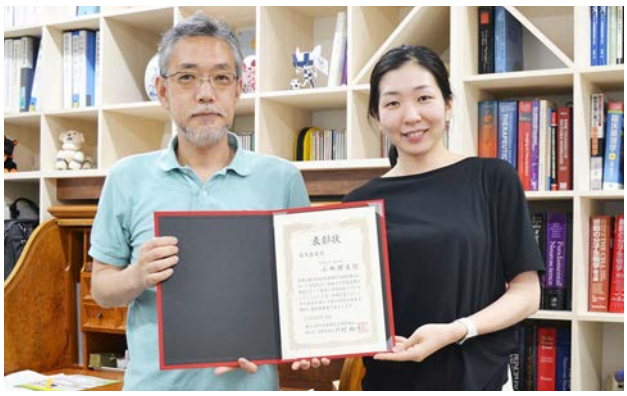
この度、第146回日本薬理学会関東部会にて優秀賞を受賞致しました。受賞した研究の内容は、難治性の慢性疼痛に対する新しい治療法を開発することを目標にしたものです。本研究では、口腔顔面領域の感覚情報を処理している島皮質において、抑制性細胞の一種であるparvalbumin陽性細胞を活性化させ、興奮性細胞の出力を制御することで疼痛に対する逃避行動を減少させることに成功しました。

今回、私にとっては初めての一般口演発表で、オンラインで開催された学会当日はPCの画面越しに私の緊張が関東中に伝わる始末でしたが、質疑応答では高名な先生から質問ならびに助言を受けることもでき、非常に有意義な機会でした。

私は研修医時代に結婚し、基礎部門である薬理学講座の大学院に進学してから２度の出産を経て、双子を含む３児の母になりました。現在では、生物学で助手として働きながら、薬理学講座で社会人大学院生の立場で研究をしています。子育てしながらのキャリアアップは厳しい道だと覚悟していましたが、実際は想像の何倍も大変でした。子供が代わる代わる風邪をひき、何日も研究室に行けない時期もあります。研究室に滞在できる時間は限られているので、家に仕事を持ち帰り、夜泣きをしている子供を抱えながらデータ解析をすることもしばしばです。幾度となく心折れそうになりましたが、その度に周囲の方々の優しさに支えられ、研究を続けることができました。

今回の受賞は、ひとえに周囲の方々の御支援のおかげです。数えきれないほどのご迷惑をかけても変わらずあたたかく御指導下さる小林真之教授をはじめ薬理学講座の先生方、そして藤田教授にこの場をお借りして深く感謝を申し上げます。今回の受賞を励みに今後とも精進して参ります。

（助手　基礎自然科学分野（生物学）／薬理学大学院生）



進学相談会を終えて

令和４年度は第１回が６月19日（日）オンラインで18組の参加があり、第２回および第３回はそれぞれ７月10日（日）と８月20日（土）に対面で実施され、受験希望者・保護者合わせて176名の参加者がありました。感染症対策のため人数制限を設けたため、あっという間に予約が埋まってしまいました。

大講堂での学校紹介、新校舎の校内見学、グループスタディルームでの教員による個別相談など好評を博しました。　　問い合わせ先　歯学部教務課

ほけん室から

2022年秋～2023年 冬のインフルエンザについて

今年もインフルエンザの流行が心配される時期となりました。新型コロナ感染症（COVID-19）の流行が始まった2020年以降はインフルエンザ感染者の報告は急速に減少していますが、日本感染症学会インフルエンザ委員会は、今秋から今冬にかけて、日本でもインフルエンザの流行が起こる可能性が大きいため、インフルエンザワクチンの接種は重要であると提言しています。COVID-19ワクチン接種の予定等もあるかもしれませんが、接種できない特別な理由がある場合を除き、インフルエンザワクチン接種を強くお勧め致します。

なお、ワクチンや体調についての質問や相談は保健室(03-3219-8050)に、インフルエンザと診断をされた場合は、速やかに学生課（03-3219-8004）にご連絡ください。

NewsPlus α

☆学部特別講義実施

9月2日（金）スポーツ科学部の澤野大地専任講師による学部特別講義が実施されました。陸上競技棒高跳びの日本記録保持者である澤野専任講師に、これまでアスリートとしての様々な体験に基づいて歯科医師国家試験合格を目指す学生に向けて、目的意識の醸成や目標へのモチベーション維持のための心の持ちようについて「モチベーションを如何に維持するか」をテーマとして、対面及びwebinarにて講義が行われました。

講義終了後には学生からたくさんの質問があり、とても有意義な時間となりました。

☆表紙写真募集中

桜歯ニュースでは、表紙に掲載する写真を募集しています。

年4回（4月、7月、10月、1月）発行していますので、季節に合った写真がありましたら、庶務課までお願いいたします。

学　事

歯学部行事予定

10月	4日（火）	日本大学創立記念日
	7日（金）・8日（土）	桜歯祭
	15日（土）	父母懇談会
	22日（土）	外国人留学生選抜，編入学試験，転部試験
	29日（土）	解剖体追悼法要
11月	19日（土）	学校推薦型選抜（公募制） 学校推薦型選抜（付属高等学校等） 校友子女選抜
12月	26日（月）	卒業者発表
1月	27日（金）	CBT

お知らせ

寄付金の受け入れ

＝研究助成金＝

30万円	サンメディカル株式会社 歯科保存学第Ⅱ講座へ （代表取締役社長　中島　祥行 殿）	6.24
30万円	株式会社松風 口腔外科学第Ⅰ講座へ （代表取締役社長　根來　紀行 殿）	7.29

編集後記

コロナの波が次から次へとおしてはひいておしてはひいてやってくる。日本大学歯学部も例外ではない。授業、面談、会議、学会はオンライン化し、入学式や卒業式、球技大会、桜歯祭、あらゆる学内行事も中止や縮小開催となった。マスクによって素顔や微妙な表情は見えにくくなった。登校の機会が減ったことで友達や先生との交流の場は減り、2年間の部活動休止により大切なタテの繋がりをも失いかけている。しかし悪い面ばかりでもない。教職員も学生もZoomという新しいツールに慣れて使いこなせるまでになった。会議や学会は自宅や移動中でも参加できるため、スケジュール管理がフレキシブルになった。紙媒体の資料がほとんど無くなり、パソコン1つで身軽になった。学生は遠隔授業によって、満員電車に乗るストレスと移動時間から解放された。コロナが収束しても完全に元の生活に戻るのではなく、コロナによって獲得した良い面は引き継がれることを望んでいる。(R.S)

表紙の写真は佐藤紀子先生（健康科学分野）にご提供頂きました。

第216号　日本大学歯学部発行
東京都千代田区神田駿河台1-8-13　TEL 03（3219）8001